

与論島における来住者とまちづくり -とくにギリシャ村を中心に-

田 島 康 弘

鹿児島大学教育学部

要 旨

与論島のまちづくりでは、来住者の活躍が目立つ。本研究ではまちづくりの一環であるギリシャ村構想を取り上げ、この実現をめぐる諸問題を検討した。その結果、地域のことは自分達でやるという自律性や、ギリシャの何を(どういう要素を)取り入れるのかについては創造性が必要なこと、などが論じられていることがわかった。また、来住者の活躍の背景には、与論の人が来住者をもてなす気持ちを持っており、彼らの能力を生かし、活用しようとする姿勢があることなどもわかった。

キーワード：来住者、まちづくり、ギリシャ村構想、自律性、創造性

New comers and their participation to the town development in Yoron Island

TAJIMA Yasuhiro

Faculty of Education, Kagoshima University

Abstract

New comers are active in the town development activity in Yoron Island. There is an idea of "Greek Village" in this town development plan which is discussed in this study. Yoron people stressed autonomy and creativity in their discussion. The former means they manage all things about their area by themselves and the latter means what kind of elements they should select in Greek culture or society. Yoron people have welcome spirit. This is the reason why new comers are active in the town development.

Key words: new comers, town development, Greek village, autonomy, creativity

第1章 はじめに

まちづくりの担い手、主役は言うまでもなくその住民であり、その地で生まれたその土地の出身者であれば、それだけその地に対する愛着も強く、そういう人達がまちづくりの中心になることが一般に予想される。しかしながら、与論町ではそのまちづくりの中で、来住者の果たしている役割、活躍が際立っているように思われるのである。

本研究ではまず、1) 与論町のまちづくりの中で活躍する数人の来住者を取り上げ、その活躍の実態を把握する。ついで、2) 与論町のまちづくりの1つの中心的な内容であり、来住者A氏が関わっている「ギリシャ村」を取り上げ、これをめぐる諸議論の検討を通して、与論町におけるまちづくりの方向やポイントについて考察する。そして最後に、3) 与論町のまちづくりにおいて来住者が活躍している背景や理由について考えてみたい。

従来、人の移動に関わって来た筆者は、はじめ与論島出身者と与論町の「まちづくり」との関係を考えてが、この点については、今までのところそれほど顕著な事実を把握することができていない。そこで、今回の報告は島外からの来住者(いわゆるIターン者)に焦点を当て、彼らと与論島のまちづくりに果たしている役割について検討することにした。

ここで、最後の考察にも関係するので、与論島から島外への出身者についてふれておきたい。

- 1、与論島出新者は1) 東京とその周辺、2) 関西が多いが、次いで3番目に3) 大牟田・荒尾地区に多いこと。
- 2、大牟田・荒尾地区に多い理由は、明治期の長崎県口之津への集団移住が、その後石炭の積み出し港が口之津から大牟田へ移ったため、大牟田地区へ再移住したためであること。
- 3、以上の他では、鹿児島、北九州、名古屋周辺、長崎、沖縄などでも出身者が多く、また、距離的に近い名瀬市をはじめとした奄美諸島にも多いこと。
- 4、出身者は各地で「与論会」を結成し、出身母体である与論島と連絡を取り合っていること。
- 5、鹿児島県肝属郡田代町にも、与論島からの満州開拓団の帰国者が入植した集団開拓移住地があり、田代町とは姉妹町関係にあること。

以上のようなことがわかっている。

第2章 与論町における人口移動

来住者の活躍について述べる前に、与論町の人口動向の概要を把握しておきたい。ここで検討する内容は、1) 与論町の人口の変化と、2) 与論町への入込客の動向の2点である。

1) 与論町の人口の推移 (図1)

与論町の人口は、戦後においては1955年が最も多く、日本経済の高度成長期に、他の農産漁村と同様の減少を見たが、1975年から1980年にかけて増加していることが大きな特色と言えよう。この原因は、次に見るように入込み客の増大に伴う観光産業の発展がその背景にあるものと考えられる。1985年以降は再び減少を始め、この傾向は現在まで続いている。

ただ、世帯数を見ると、高度成長期に多少減少したが、その後は増加しており、とくに、人口が再び減少した1985年以降も増加傾向にあることが読み取れる。このことは、必ずしも過疎化が著しいということではないこと、また、人口減少の中味は、青年層の流出であること、を予測させるものである。

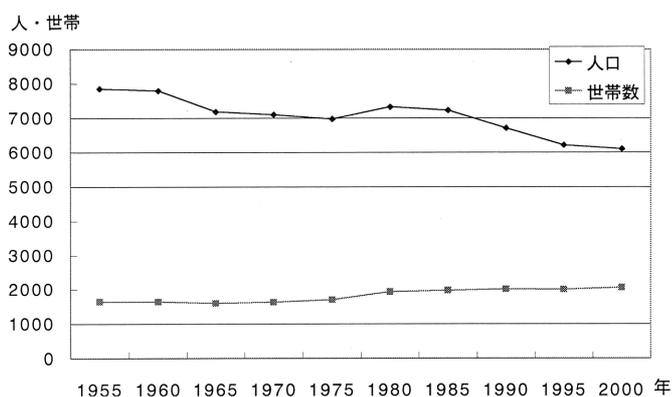


図1 与論町の人口の推移

2) 入込客の推移 (図2)

次に、与論町への入込客の推移をみると、1970年代に急増し、そのピークの1978-79年には15万人を超えた。その後も1980年代前半までは10万人以上を維持していたが、80年代後半は9万人台となり、90年代前半は8万人台、後半は7万人台と、徐々に減少の傾向をたどってきている。

図では示さなかったが、以前の入込み客は船による客が圧倒的に多かったが、船客は次第に減少し、1990年代の前半は逆転して、飛行機客の方が船客を上回った。その後はほぼ同数の状態が続いている。

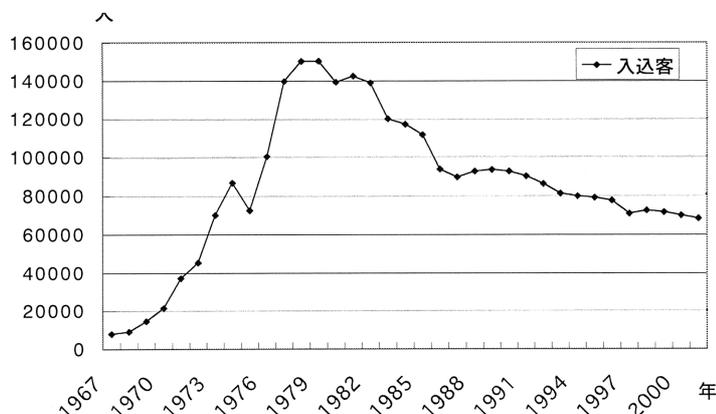


図2 与論町の入込者の推移

第3章 来住者の活躍

ここでは、与論町の来住者(I ターン者)の中で活躍している人びとに注目し、聞き取りから明らかになったその内容について整理してみたい。ここで具体的に取り上げる人は、1) もずくそば製造・販売のS氏、2) 貝細工工芸のA氏、3) 与論健康村のK氏、そして4) 土産物店経営のA氏の4人である。この他、I ターン者ではないが、U ターン者の1人として活躍している与論民俗村のK氏についても、比較の意味も含めて取り上げてみたい。

1) もずくそば製造・販売のS氏

S氏は1937年、栃木県、栃木市の生まれで、20才の時、関西(神戸)に出て、食品関係の仕事をしていた。40才の時に与論に遊びに来て、海のない県に生まれた彼は「与論の海のきれいさのとりこ」になった。与論に来た時は「一文無し」であったが、家や着物に金がかからず、また、「酒やタバコもしなかった」ので生活費がかからなかった。何より、与論の人には人情や人間味があって、「朝起きてみると玄関に野菜が置いてあり」、また、家にカギをかけることもなかった。

ときあたかも、氏が与論に移住した1977年は与論の観光がピークに達する直前であり、1976年には与論空港が開港し、1978年、78年には入り込み客が15万人を超えた。氏が経営する店のラーメンやコーヒーは味も良いということもあって「いくらでも売れた」。

こうした中で、特産品づくりも始めたが、はじめは全く売れなかった。しかし、氏は麺類が好きであり、また与論では4月から6月にかけて、天然のもずくが取れたので、こうした条件を生かして1988年に「もずくそば」を開発したのである。これもはじめは、島内で行われる同窓会の会合や年越しそばなどの際に、ただ(無料)で島中を配って歩いたそうであるが、やがて次第に「おいしい」という評判を得、現在では与論島の土産物としてはもちろん、島内のどの店やスーパーでも売られており、また、民宿でも使われている。

防腐剤や着色剤はいっさい使わず、手作り、自然乾燥を自慢にしている。家族労働の他、従業員が8人おり、年間3000〜4000万円の売り上げがある。ただ、原料のもずくは与論だけでは足りないので、沖縄の本島や離島のものを使っている。

もずくの他にキビ酢の生産も少しではあるが行っており、また、海水を引き上げて塩、にがり、蒸留水などの生産も行っている。

氏はまちが組織する「特産品開発グループ」のメンバーの1人でもある。

まとめると、氏は1977年40才で与論に来て、1988年「もずくそば」を開発し、1997年もずく工場だけが存在した現在地に青い海と沖縄本島が見えるレストラン「青い珊瑚礁」を開業し、さらに製塩等の製造も行うに至っている。氏は主として特産品開発の面で与論町のまちづくりに貢献している

2) 貝細工加工のA氏

A氏の本業は貝細工芸で、大きな貝を削って装飾品などに加工し、島内外の土産物店等への販売の他、自分の店での販売も行っている。しかし、氏の話はもっぱら情報関係の話が中心であった。氏は町が組織する情報グループのメンバーの1人であり、この面で氏は与論町のまちづくりに貢献していた。

間もなく(2003年9月)インターネット上で「与論情報サイト」をテストオープンし、10月に正式にスタートする。高速化が実現できるADSEが町長を先頭とするNTTとの交渉で、奄美では名瀬市に次いで2番目に与論に導入されることが決まった。まずは与論の文化を発信することから始め、そのうち、与論でも可能なIT関係の産業が島内で生まれ、また島外から進出して来たりすることを期待している。さらに、島内の生産物のITを通じての販売をも目指している。

与論の情報化を目指しているこのグループはE-OK(イーマルケイ)と呼ばれ、そのメンバーは実質10名程度で。

- 1) まずはサイト自体を人気のある魅力的なサイトにする
- 2) このサイトを全国に散在する与論関係者の交流の場にする
- 3) やがては次の段階として物産の販売をおこなう

を目指して活動している。いずれにしても情報の交流が最初であり、ビジネスは次の段階、として区別している。また、情報交流の方は島内部での活用も大に行って行きたいとする。

氏は1973年来島し、自然環境の良さが気に入って定住を決めた。5年後の1978年に結婚している。この当時、とくに1970年代の後半から80年代の前半は、入り込み客が10万人を超え、若者を中心としたたくさんの観光客が本土から来ていた時期で、氏の貝細工の仕事もこうした中で始められたものである。しかし、その後は入り込み客は減少ないし停滞傾向が続いており、何とか若者を呼び戻したいと氏は願っていて、それには仕事があ

ることが必要だと考えている。氏が取り組んでいる情報化もこれに結びつくことを望んでいる。

氏によれば、観光客が減っている理由の1つは、交通の便とりわけ航空交通の便が悪いからであるという。本土からの客のほとんどは沖縄経由で来るが、那覇—与論間の便数が夏でも週3便、冬は1便しかなく、那覇—久米島間の週5便などと比べて不便だからだというのだ。ただ、海水の淡水化設備の設置で水も良くなってきたし、病院もあり、何よりも人びとが協力的で住みやすいことを氏は強調した。

3) 与論健康村のK氏

与論のまちづくりにおける氏の活躍は既に紹介もされており、良く知られているので、ここでは簡単にしたい。

徳島県生まれの氏は、熊本での病院長などの経歴を経た後、1988年に与論で定住をはじめ、1995年に与論健康村を発足させた。その後、タラソテラピー(海洋療法)を学んで与論に導入する。2001年7月にはJETROの協力も受け、町からタラソテラピーの視察のためギリシャへ派遣され、以後、これを柱にまちづくりに取り組んでいる。

タラソテラピーとは何かについて氏自身は「治療の目的で海水と海藻、そして大気と海洋性気候の特性を組み合わせる活用するものである。この治療に必要なのは海岸地帯の施設であり、これはあらゆる汚染を排除した新鮮な海水を汲水できる特別な装置を持ち、微気候的に有名な土地に建てられる」という定義を引用しているが、健康村のホームページにある「海洋の自然環境を利用して免疫力を回復させ、病気の予防、治療を行う根拠的な療法」のことという説明の方がわかりやすい。

ギリシャ視察から半年後の2002年2月、クレタ島のタラソテラピー施設経営者M.A.氏の来島と講演をきっかけに氏はタラソテラピー研究会を発足させ、同年7月20日ブリアリゾートで第1回研究会を開催している。また、9月には与論町から6名がタラソテラピーの視察のためにギリシャに行き、2003年2月にはギリシャから専門家を招いてタラソテラピーに関するフォーラムやセミナーを開催しており、タラソテラピーを取り入れたまちづくりが進められて来ている。

この他、氏が村長である健康村では、『健康作り』『環境作り』『地域交流』の活動を通じて、健康で自然と人が共存する豊かな社会作りを推進している」として、健康作りでは、健康指導、定例ウォーキング、エイサー教室を、環境作りでは、ケナフ栽培、クリーンエネルギーへの取り組み、海岸の清掃を、地域交流では、北海道新冠町との交流をそれぞれあげている。

これらは与論町のまちづくりの一部を担った活動と言えるだろう。氏の考えは健康を中心としたまちづくりそのものとも言えよう。

4) みやげ物店経営のA氏

A氏は東京に生まれ、某大企業のサラリーマンをしていたが、会社勤めがいやになり、1971年会社を辞めて人生の節目の旅行を企て、たまたま泊まった鹿児島ユースホステルで与論から帰って来た人に会い、その人の話を聞いて与論に来ることになり、そのまま住み着いたのであった。

翌年の1972年には沖縄の本土復帰が実現し、離島ブームが起きつつあった頃であり、また、ヒッピーとかカニ族などと言われた旅行形態が生まれていた頃でもあった。最初の半年間は民宿のヘルパーをし、その後、みやげ物店でのアルバイトに移った。この店は貝細工のアクセサリーを自ら製作し販売する店で、例えば、パイプウニのからを加工して風鈴にしたり、別のアクセサリーにしたりしていた。この店でのはじめの3〜4年間は、主に出来上がった製品を各小売店に卸す仕事で、このため沖縄本島から八重山の離島まで飛び歩いたと言う。

定住から5年後の1976年、ようやく独立して自分の店を与論の銀座通りに開くに至った。その後、沖縄の国際通りに2軒の店を開く程にもなったが、家族のことも考えて今は与論だけである。

ところで、A氏のまちづくりへの関わりはギリシャ村に関してである。氏は現在、ギリシャ村推進実行委員会会長で、与論島ギリシャ村の代表であり、ギリシャ村づくりの中心人物である。A氏のギリシャ村を通してのまちづくりへの貢献については、章を改めて述べることにしたい。

5) 与論民俗村のK氏

最後に、Iターン者ではないがまちづくりに活躍しているUターン者のK氏についてふれておこう。

K氏は現在、「与論民俗村」の経営者である。この民俗村は与論の民家や与論で使われていた様々な民具などが展示されているが、これらは主にK氏のお母さんが収集したものである。K氏のお母さんは民具の収集だけでなく、与論の人びとの衣食住の生活や言葉・方言など、与論の文化全般に亘って収集や研究をした人で、学識経験者として町の第4次総合計画の審議委員にもなっていた人である。

K氏自身は、1975年18歳の時島を出て23〜24歳の時戻ったのであるが、Uターンという意識はないと言う。氏の兄弟5人も皆こちらに戻って生活している。氏は、お母さんの考えを受け継いで与論の伝統文化の保存に努め、このことを1つの仕事として成り立たせている。観光客に芭蕉布織りや黒糖づくり等の体験教室などを開き、与論の伝統文化の紹介に努めていて、与論のまちづくりには欠かせない役割を果たしていると言えよう。

氏は昔の人の生活の中で大切なものは、ものよりも言葉や心であることを強調され、近年の学校教育の中でもこのことが見直されて、K氏をはじめ地域の人が呼ばれるようにな

ったことを評価していた。また、現代の生活が珊瑚を死滅させていることや、ソテツやガジュマルを切ってしまうことなどの問題についても指摘された。

第4章 来住者 A 氏とギリシャ村

本章では、与論島におけるまちづくりの1つのポイントをなすギリシャ村について取り上げ、これと来住者 A 氏とのかかわりや A 氏が果たしている役割について扱いたい。このためにまず、1)与論島とギリシャとの交流の経過について概観する。次いで、2)こうした交流と A 氏との関わりについて扱い、その後で、3)ギリシャ村構想とまちづくりの方向をめぐっての諸問題について検討したい。

1) 与論町とギリシャ、ミコノス市との交流

1970年代の末、与論は「入り込み客」のピークを迎えるが、80年代に入るとその数は減少を始める。83年の「ヨロンパナウル王国」の建国はこうした客の減少に対する対策の1つだったのであろうが、84年のミコノス市との姉妹盟約も同様の対策の1つであったと言えよう。当時、観光地としてのレベルアップを図るためには、国際交流の推進が必要とされ、地中海の海洋観光島であり、また、与論とほぼ同程度の人口規模を持つギリシャのミコノス島が注目されるに至ったのである。1984年11月、与論町の26名がミコノス島を訪問し、11月14日、市庁舎で姉妹盟約が締結された。しかしながら、こうした努力にもかかわらず、客の減少は止まらず、その後は86年にギリシャ風の中学校体育館の完成や89年のギリシャ風茶花港待合所の建設がなされたくらいで、ギリシャ熱は下火になっていた。

こうした中で、再びギリシャとの交流に注目した動きが1997年の「ギリシャ村」の動きであった。この前年、茶花海岸の海岸道路をミコノス通りと命名したことがこのきっかけとなったようだ。この「ギリシャ」村とは、茶花の市街地の一部で白い建物が立ち並ぶ一角を中心とする地区の14軒から構成されている「村」のことで、「魅力のある、歩いて楽しい街並み」作りを目指して結成された。開村式にはギリシャ大使館員を招待して盛大に行ったり、また、村の代表がミコノス市を訪問したりするなど活発な交流を行っている。さらに1999年11月には、姉妹盟約15周年を記念して式典を開催し、同時に「ギリシャ村地域づくりシンポジウム」を行っている。このシンポジウムの主催は、ギリシャ村をさらに広げた「ギリシャ村通り会」(70事業所が加盟)で、2000年、2001年と計3回継続して行なわれた。2001年頃からは新たにタラソセラピーが、ギリシャとの交流の1つの内容として入って来るようになる。

2) ギリシャ村と来住者 A 氏

以上述べたギリシャとの交流の中で、当初の盟約締結当時は「町」が中心であったが、

1990年代後半以後の動きはむしろ「民間」が中心となっており、この民間の中の中心人物がA氏であった。すなわちA氏は1997年に開設された「ギリシャ村」の代表であり、また、「中央通り会」の会長も兼ねていて、のち両者は統合して70名(事業所)を組織する「ギリシャ村通り会」となり、その会長にも就任している。

前述の与論・ミコノス姉妹盟約15周年記念式典は、この「ギリシャ村通り会」が主催したもので、役場を動かし、ギリシャ大使館員を招くなど盛大に行っている。また、前述の「ギリシャ村地域づくりシンポジウム」の他、1999年以降毎年「ギリシャフェスティバル」を開催しており、2003年には「ギリシャ国際シンポジウム」を開いて、ギリシャとの交流やまちづくりの方向に関する議論を進めてきている。

ところで、以上のような行動の元になっているA氏の考え方やギリシャ村構想とはどのようなものなのだろうか。

2000年8月、与論町企画調整課は、「21世紀の与論」と題する作文の募集を広く町民に呼び掛けたが、この一般の部の最優賞にA氏の「ギリシャ村を考える」が当選したのである。この内容は次の7つからなっている。1初めに、2与論・ギリシャの交流の経緯、3ギリシャ村の目的、4ギリシャ村10年後の将来、5専門家からの意見、6与論の抱える問題、7終わりに

この中の特に3の目的では、「現在進められている与論港コースタルリゾート開発計画」という「巨大プロジェクトにギリシャ村構想を噛み合わせ、官民一体となった地域興しにより、日本に唯一冠たるギリシャ村を構築し、与論の経済・観光の浮揚・再生に繋げることが目的である」としており、また、4の「10年後の将来」の部分では「与論の表玄関の供利港・空港周辺からバラダイスビーチ(ギリシャ風車建設予定)・プリシアリゾートを経て、コースタル開発地区・茶花市街地・宇和寺団地までの海岸一帯」をホワイトカラーで統一した景観にし、役場、漁港、商店街、近隣住宅の連繫・協調性を作り出し「町を活性化させ、さびれた観光地というイメージからの脱却」を図る主旨のことを述べている。このような内容からギリシャ村構想やA氏の考えを一定程度知ることができる。

民間人である氏の考えは行政によって高く評価され、計画に取り入れられている。すなわち、2001年3月、与論町は「人と自然が輝くオンリーワンの島づくり」と題する第4次与論町総合振興計画を発表したが、その第4章、戦略プロジェクトの1つに「生きた博物館構築プラン」があり、その中で、「ヨロン・ギリシャ交流のまちづくりの推進」の項目が設定され、「ギリシャ風建築物の建設促進」や「ギリシャ関連施設の充実」が指摘されている。また、第5章基本計画の3産業の中の④観光の部分でも、「ギリシャ風の景観づくり」についてふれている。

3) ギリシャ村構想とまちづくり

ギリシャ村構想には、「何故与論でギリシャなのか」をはじめとして様々な議論があり、

それ故こうした問題をめぐって何回かのシンポジウムが行われてきた。ここではギリシャ村構想とまちづくりの方向に焦点を当て、議論の整理をしてみたい。この問題に焦点を当てたシンポジウムは1999年から3年に亘って毎年行われたギリシャ村地域づくりシンポジウムであり、特にその第2回目は「ギリシャ村構想の実現に向けて」と題するパネルディスカッションが行われ、ここに論点が集約されているように思われる。そこで、この内容について紹介し検討してみたい。

このパネルディスカッションは、(1)景観とまちづくりの動向、(2)与論町におけるギリシャ村の意義、(3)与論とギリシャとの経済交流、の3つの事柄を柱に進められたが、(3)についてはまちづくりとの関連も少なく、かけた時間も少なかったためここでは省略し、(1)と(2)についてのみ取り上げたい。

(1)の景観については「道を狭くした方がにぎやかに見える」「電線の地中化を進めるべき」「建物の形や色の調整をどうすすめるか」などの指摘が各パネラーから出され、これらに基づく議論がなされた。しかし、議論の中心は次の与論町におけるギリシャ村の意義の部分であったと言えよう。

まず、ギリシャ村を推進している側および会場から、その意義についての次のような主張がなされた。

- ① 民間主導で行っていることに意義がある。
- ② ギリシャ風にすることにより、他の地域との差別化が生まれる。
- ③ 与論における多様性の中の1つとしてのギリシャ村として意義がある。
- ④ ギリシャ風の風景や文化が心地良さや健康づくりの素になれば良い。

次に、会場からやや批判的あるいは疑問的な、次のような意見が出された。

- ① 現状では与論のギリシャ村は中途半端である。
- ② 景観の統一は必要なのか、また、現実に可能なのか。
- ③ 景観もさることながら、インフラ整備をしっかりとやることの方が大切ではないか。

これらの意見に対しては、次のような反論的な、またはこれに答えるような議論がなされた。

- ① まず、景観に関しては、従来のまちづくりの中にはストーリー性や方向性がなかったものであり、そうした中で白色での統一は1つの方向を打ち出した答えだったのだ。
- ② ミコノスとの盟約を結んだ1984年当時は観光客が10万を切り、こうした中で観光浮揚対策として打ち出されたものである。白には清潔感もあり、島のイメージを出せる建物は何かを考えたとき、ギリシャ風しかなかったのだ。

さらに議論は深まり、次のような重要な指摘がなされてくる。

- ① ギリシャ風とは何なのか。古代の神殿かあるいは現代のミコノスカ、または通りの狭さか。要するにギリシャのどういう要素が「ギリシャ風」なのかを考える必

要がある。

- ②「誰かがやってくれるだろう」ではなく、地域のことは自分達でやるという点でギリシャ村（村民会議）の人達は立派だ。その声が行政に反映されていることも大切だ。要するに、自分達の地域のことは自分達で考えて行動することが大切だ。そして、町のあるべき姿をもっと議論すべきである。

以上のパネルディスカッションの議論を通して筆者が感じたことを述べておきたい。

- ① ギリシャ村はそれ自体が最終目的ではなく、あくまで与論の観光浮揚やまちづくりの手段だったはずであるし、今後もそう位置付けて進むべきであろうということ。すなわち、より基本的な、または大きな目的を優先させて、あるいはそれに位置付けて、ギリシャ村を考えるべきではないかということ。
- ② ギリシャというのは、1つのヒントとして捉えるべきなのではないかということ。何がギリシャ風かという発想は、ギリシャ的なものをヒントとして、ギリシャ的なものの中で自分達にとって良いもの、与論にふさわしいものを選択して取り入れてゆくべきことを示しているのではないかということ。こうした意味では、「ギリシャ」を取り入れることは「まね」ではなく、「創造」に近いものと言えるのではないかということ。そして、そのためにも、ギリシャに限らないかも知れないがギリシャについても、もっと知って行くことが求められるであろう。

第5章 与論のまちづくりと来住者

以上見てきたように、与論島のまちづくりには来住者が大変活躍している。これは何故なのだろうか。最後にこの点について整理して、考えてみたい。

- 1、まず、はじめに見たように、たくさんの方の与論島出身者が関東や関西を始め日本各地に移住して活躍しており、その数は島の人口の2倍とも言われている。とくに、福岡県大牟田市や鹿児島県田代町などの集団的な居住地もあり、島が本土に開かれていて壁がないことがあげられよう。
- 2、現在、与論に居住する成人のほとんどが、学生としてあるいは出稼ぎ者として、島外での生活の経験を持っていること。このことは本土の人びとの状態や気持ちを知っていることを意味すること。
- 3、1970年代の後半から80年代の前半にかけて、若者を中心とする膨大な「都会人」を受け入れ、もてなした経験を持つこと。このことも、上記2や1と同じ意味すなわち、本土の人に対する違和感をほとんど持っていないことを意味するだろう。
- 4、現在、まちづくりで活躍している人も、この時に来て住み着いたものが多く、このことは彼らをも3の延長上で考えているであろうこと。
- 5、与論の人びとが外から来た人びとの積極性や独創性、先覚性を認めて評価し、これを

自分達のまちづくりに生かし、活用しているように思われること。

6、人口減少と言う現実の中で、実際に来住者を歓迎して行政の中に取り込む工夫をし、活躍の場を与えていること。

以上のようなことから、与論では来住者の活躍が、他地域に比べて目立って見られるのではないかと思われるのである。